

「イスラエル建国史」

31 英委任統治下のパレスチナ 8

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト (<http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/>) で公開しています。

分割計画を放棄したイギリス

1930年代中頃から十数年間は、これまで着実に発展してきたイスラエルの建国運動にとって、まさに八方ふさがりのような時代になった。パレスチナではアラブの暴動が続き、その影響を受けてイギリスの政策が後退し、ヨーロッパではホロコースト(1933～1945)の時と重なり、ユダヤ人社会が絶滅の危機に直面した。

ピール委員会の報告がでた2ヶ月後の1937年9月、アラブ側は再び暴動に訴えた。攻撃されるのは、ユダヤ人社会だけではなく、英委任統治機関そして穏健派アラブ人も、攻撃対象になった。この騒乱は1938年7月～10月をピークに、1939年春頃になって終息するが、1年半に及ぶ暴動でユダヤ人415名が犠牲になった。

イギリスは、1万6,000の兵力を投入して、暴動を鎮圧し、暴力を教唆煽動したアラブ高等委員会のメンバー達を逮捕、セイシェル諸島へ追放した。最高幹部の大法官フセイニは御用の身となり、シリアへ逃げた。しかしその一方でイギリスは、連続する暴動に辟易し、ピール提案をたたき台としたウッドヘッド提案(三案で構成)をだしながら、実現不可能と自らこの案を放棄した。1938年11月9日、イギリスは分割計画の放棄を表明し、爾後の方針について話合うため、アラブ・ユダヤ双方の代表団をロンドンに招いた。

この話合いは1938年の円卓会議と開催場所の名をとって、セントジェームズ会議といわれるが、そもそもアラブ側はユダヤ機関の存在を認めず、ユダヤ人代表団との直接対話を拒否し、三者

合同会議が開けなかった。別々の会議になり、結局何の成果もなく、鳴り物入りで召集された会議は無駄に終わった。

拡散するドイツのユダヤ人迫害

ドイツからの流出は続き、1933年から1937年まで、13万人が国を離れた。更に翌1938年には、ドイツ国内とその周辺で大きな事件が起き、ユダヤ人社会の窮状はいよいよ深まった。



アドルフ・アイヒマン

第1は1938年3月のアンシュルス(ドイツのオーストリア併合)である。併合によってナチのユダヤ人追放政策はオーストリアにも適用されることになった。1938年8月、親衛隊(SS)の保安部(SD)に勤務するユダヤ問題の実務担当者アドルフ・アイヒマンがウィーンにユダヤ人"移住"局を開設し、強制移住と資産没収に着手した。アイヒマンは、18ヶ月足らずで約15万のユダヤ人をオーストリアから追い出した。

第2が、1938年9月のズデーテン地方占領。チェコスロバキアは翌年3月に解体され、当地のユダヤ人社会はオーストリアの場合と同じ憂目にあう(ドイツではユダヤ人口50万の内50%強が国外へ流出した。オーストリアのユダヤ人口は、ナチによる併合前18万3000人で、そのうち18万がウィーンに集中していたが、

【これまでの流れ】

1948年のイスラエル建国は、空白地帯に突如降って湧いたようなものではない。イスラエルが建国されたパレスチナの地には、建国のはるか以前からユダヤ人共同体が存在し、祖国建設を目指して祖先の地に移住したユダヤ人たちの地道な努力があった。

1930年代は、パレスチナのユダヤ人社会がしっかりと根を下ろし、教育や文化面を中心に社会基盤が急速に整備されていった時代であった。しかし、そうしたユダヤ人の発展に嫉妬したアラブ人は、ユダヤ人に対する暴動を繰り返すようになる。1936年に起こったアラブの暴動を受けて英国が派遣したピール調査団は、パレスチナをユダヤ人とアラブ人で分割するという提案を行った。これまでは、ユダヤ人の「ナショナルホーム」建設を認めるとしか言っていなかった英国が、ユダヤ人国家の建設を事実上認めたのである。

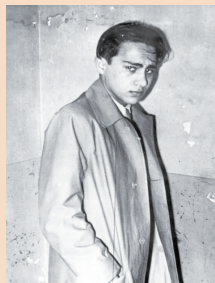
1938年3月から1939年5月までに8万5000人が流出。ズデーテン地方に居住するユダヤ人2万はボヘミアとモラヴィアへ逃げた)。

クリスタルナハト

1938年11月9日夜、ユダヤ人流出を加速する事件が起きた。全国規模で行われた組織的反ユダヤ暴動で、世にいうクリスタルナハト(水晶の夜事件)である。

同年10月28日、ポーランド政府が旧旅券の失効を発表すると、ドイツは直ちにポーランド国籍者のユダヤ人1万7,000人を逮捕し、ポーランド国境のズボンシーニへ移送し、無人地帯に放置した。ポーランド政府は、失効旅券の携帯者として入国を認めず、勿論ドイツは追い出すのが目的である。ユ

ダヤ人達は食物もなく、厳寒の中で立往生した。11月7日、パリのドイツ大使館に来た17歳の青年H・グリンシュ



H・グリンシュパン



クリスタルナハトで破壊されたシナゴーク

パンがピストルでエルンスト・フォン・ラート三等書記官を撃った。ズボンシーニで苦しむ両親に復讐すべく、大使を狙ったつもりが、間違ったのである。ドイツの反ユダヤ大暴動は、これが引金となった。

難民流出に対する国際社会の反応

国際社会は、同情を装いながら、具体的な行動は殆んどとらなかった。

1933 年 10 月ドイツから流出するユダヤ人難民問題を解決するため、国際連盟は、高等弁務官事務所を開設し、アメリカ外交政策協会のジェームス・G・マクドナルド会長を高等弁務官に任命した。しかし、ドイツの猛烈な反対で連盟から予算がとれず、更に難民受入れを打診した諸国から色よい返事を貰えず、失望したマクドナルドは 1935 年末に辞任した。

アイヒマンのユダヤ人追い出し計画と相前後して、1938 年 7 月 6 日から 15 日まで、ジュネーブ湖岸の町エビアンで、難民救済を目的とする国際会議が開催された。開催地の名をとって、エビアン会議ともいわれる。米英仏を初め、ラテンアメリカ諸国、オーストラリア、ニュージーランドなど 32 ヶ国が代表を送った。しかし、延々 10 日間も続いた会議は、何も生みださなかった。提唱国のアメリカは「独逸からの年間移住割当 2 万 7,370 人を、両地域からのユダヤ人難民を含めて受入れる」と主張し、受入れ枠の拡大を認めなかった。



イギリスは、パレスチナへの受入れ拡大はないと事前に通告し、植民地への受入れは余裕なしとして拒否した。ほかの国も大同小異で、人口過剰、経済不況、失業率の増大などを理由に、ユダヤ人難民の受入れに消極的であった。

そのなかでオランダが積極的な姿勢を示し、ドミニカ共和国は、農業開拓民として 10 万人の受入れを表明した。ジョイント*が開拓用の土地購入にのりだした。しかし、大戦勃発で渡航できなくなり、結局 500 名ほどしか入植しなかった。

それでも 5,000 人分のビザが確保されていた。それはまさに命のビザであった。独逸を追いだされても、受入れてくれる国のビザが無ければ、途中の経由国は、通過を認めてくれないので、直ちに立往生するのである。

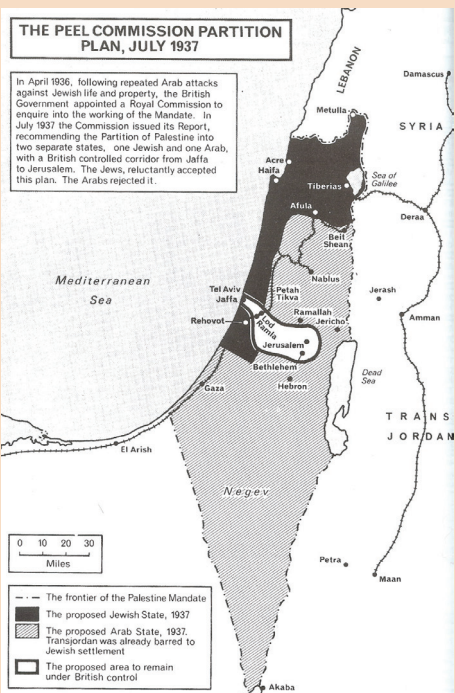
ドイツ系ユダヤ人難民の受け入れ地 (1933-38)		
	国名	人数
1	アメリカ	102,222
2	アルゼンチン	63,500
3	パレスチナ	33,399
4	南アフリカ	26,100
5	上海	20,000
6	オーストラリア	8,600
7	ブラジル	8,000
8	ポーランド	7,000
9	カナダ	6,000
10	キューバ	3,000
11	ウルグアイ	2,200

出典：M・ギルバート「ホロコースト歴史地図」

パレスチナユダヤ人社会の決意

ピール委員会の提案は、パレスチナを三分割し、これをイギリス・ユダヤ・アラブの三者に割当てて内容であった。ユダヤ側に割当てられたのは、東西両ガリラヤ地方、海岸平野部の帯状の地域（アシッドットの南まで）であった。イギリスは、エルサレムからテルアヴィヴ・ヤッフォへ至る回廊を確保する。エルサレムを含む周辺、ハイファ、ヤッホ、エイラートはイギリスが手にし、更に回廊が海岸の帯状地域を分断していた。アラブにはウェストバンクとネゲブが割当てられた。

1937 年 8 月 3 日からチューリッヒで開催された第 20 回シオニスト kongress では、この分割内容に反対する声が強くなり、「歴史的エレットイスラエルの喪失になる（ウシュシキン）」、「領土が如何にも小さく、しかも聖書ゆかりの



ピール委員会の提案

地の主なところが失われる（カッツネルソン）」などの声があいついだ。ワイツマンも不満であった。しかしベングリオンは、小さくても国を持つ有利性を説いた。

ベングリオンは、その前の 4 月 10 日に開催されたマパイ（労働党）中央員会で、ユダヤ人国家構想を発表した。それはガリラヤ地方、海岸平野部、ネゲブ、死海沿岸域からエルサレムを含む地域、であった。そして、「イギリスが反対するから、この構想は非現実とか、アラブは絶対受入れないと主張する人がいる…」、しかし「イギリスは、アラブ、ユダヤ双方の要求を無視できない…更に、アラブが暴力で反対するから駄目と主張するのは、アラブが我々の運命を握っていると言うに等しい。我々は我々の運命を他者にゆだねることはない…」と述べた。そこには自分達の将来は自分たちで決めるという固い意志が見られた。暗いホロコースト時代に灯る唯一の光明が、ベングリオンに代表されるパレスチナユダヤ人社会のこの決意であった。【次号につづく】

* ジョイント：アメリカ・ユダヤ人共同配給委員会。

1937 年長崎県生まれ。

早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人